

『神奈川県立博物館研究報告―人文科学―』第四十八号 抜刷（二〇二二年二月）

【研究ノート】

芝浦製作所電気技術者の岸敬二郎と関東大震災の復興事業

武田周一郎

【研究ノート】

芝浦製作所電気技術者の岸敬二郎と
関東大震災の復興事業

武田 周一郎

【キーワード】

関東大震災 芝浦製作所 電気技術者 岸敬二郎 水力発電

【要旨】

本稿では、芝浦製作所の電気技術者である岸敬二郎の書簡を分析し、関東大震災の復興事業の一例として芝浦製作所の被災から工場での生産再開に至る経緯を詳細に明らかにした。岸は、芝浦製作所の電気技術者として製品の開発に取組むとともに、その技術を活かして日本各地で水力発電事業に携わり、電気工学や土木工学等を専門とする技術者や企業家との間に広範な人脈を築いた。関東大震災によって芝浦製作所が甚大な被害を受けると、岸は自身の人脈を活かして工場の復旧を進めた。書簡からは、岸が多忙な日々を喜び哀れを感じる様子や、将来に希望を持って復興事業に邁進しようとする姿勢が看取された。

はじめに

本稿の目的は、芝浦製作所の電気技術者である岸敬二郎の動向を通じて、関東大震災の復興事業の一端を明らかにすることである。岸敬二郎は芝浦製作所の技術部長や常務取締役を務めた人物であり、その業績は死後に刊行された伝記である『工学博士岸敬二郎伝』^①に詳しい。岸は多くの電気技術を開発し、生前から「非凡の発明的天才を有する電気学者」^②や「我国電気事業界の恩人」^③といったように電気技術者として著名であった。また、岸が関東大震災で甚大な被害を受けた芝浦製作所の復興事業に貢献したことは、同社や東京芝浦電気（現東芝）の社史^④で明らかにされている。

この岸敬二郎に関する専論は少ないが、例えば技術史の観点から三枝博音^⑤が小伝を記している。三枝は、日本の近代技術は明治末期に躍進期を迎えたとし、その代表的な部門として電気技術を挙げたうえで、岸を当該期における電気技術者の代表的な一人に位置づけた。また、森川英正^⑥は経営史の観点から三井財閥の工業化過程を検討するなかで、岸は芝浦製作所における電気技術陣の中軸であり、かつ日本の電気関係事業全体にわたる「技術者集団の指導的存在」であったと指摘している。いずれも岸を当該期における電気技術者の代表的な存在として位置づける見解であり、芝浦製作所に留まらない岸の幅広い活動範囲を踏まえた的確な指摘といえる。しかし、両者は前述した『工学博士岸敬二郎伝』に依拠しているため、岸の動向については同書の範疇を出ない。

そこで注目されるのが、岸敬二郎に関する新出資料である。当館では、二〇一九（令和元）年に岸敬二郎の遺族から地図帳等の寄贈資料を受け入れた。また、翌年には同じく遺族から東芝未来科学館へ関連資料が寄

贈された。この資料群に含まれる書簡は、復興事業の詳しい動向だけでなく、岸の姿勢や日々の感情までも仔細に読み取れる点が特徴であり、伝記に記載されない情報を把握しうる。

ところで、一九二三(大正一二)年九月一日に発災した関東大震災は、マグニチュード七・九の巨大地震と、それに伴う火災や山崩れ、津波等によって関東地方に甚大な被害をもたらした。関東大震災を記録した資料は数多く、その種類は多岐にわたる。これまで刊行物や写真のほか、映像、出土遺物、地層といった資料を分析対象として、この災害が社会に及ぼした影響の諸相が明らかにされてきた⁷⁾。なかでも個人による手記等の資料は、記載内容の豊富さから記録性が高い⁸⁾。岸の書簡は、その大半が震災後に書かれたものであり、被災状況や復興過程を理解するにあたって有用である。三枝や森川が指摘するように岸が当該期における電気技術者の代表的な存在であるとすれば、震災に直面した岸の動向に関する分析は、災害史研究に資するところが大きいといえよう。

そこで本稿では、まず関東大震災以前の岸敬二郎の動向について水力発電事業との関わりを中心に把握する。次に、震災時の岸と芝浦製作所の対応を詳細に検討し、最後に震災後の復興事業における岸の取組みを明らかにする。

一 岸敬二郎の経歴

(1) 岸敬二郎と芝浦製作所

岸敬二郎(図1)は、一八六九(明治二)年三月一五日に和歌山城下(現和歌山市)で生まれた⁹⁾(表1)。父の新作は龍門や公恭と号し、一八七八年に国立第四十三銀行の創立発起人になったほか、翌年には和歌山県会議員に選出されている。また、敬二郎の兄である幹太郎は、一八八



図1 岸敬二郎(『工学博士岸敬二郎伝』、個人所蔵)

一年に慶応義塾を卒業後、同幼稚舎教授、日本銀行を経て、一八九七年に横浜正金銀行へ入行した。同行では用度課長からロンドン支店勤務となりハワイ支店長を務めた後に退行し、紀州徳川家の家令になった¹⁰⁾。

岸敬二郎は和歌山中学校から、第三高等中学校と第一高等中学校を経て、一八九五年七月に帝国大学工科大学電気工学科を卒業すると芝浦製作所に就職した。芝浦製作所は一八七五年に初代田中久重が新橋に創設した工場に始まり、二代田中久重が芝浦に工場を移した後、一八九三年一月に三井銀行が継承して芝浦製作所と改称していた。岸は芝浦製作所の電気部に入り、電気技術者として製品の開発に取り組んだ。なかでも自身の卒業論文に基づいて開発した二相式誘導電動機は日本における誘導電動機(モーター)製作の発端として知られている¹¹⁾。また、岸は自社製品を用いて他企業の工場電化を手掛け、各種の産業を支えた。例えば、岸は一八九六年から翌年にかけて王子製紙王子工場(東京)のタービン発電室設置を芝浦製作所の納富馨一と請け負った。王子製紙側の担

表1 岸敬二郎の経歴

| 西暦 | 和暦 | 月 | 日 | 事項 |
|------|------|----|----|---|
| 1869 | 明治2 | 3 | 15 | 和歌山城下で生まれる |
| 1875 | 明治8 | 7 | 11 | 初代田中久重が新橋に工場を創設 |
| 1882 | 明治15 | 11 | | 二代田中久重が芝浦に工場を建設し田中製造所と称する |
| 1885 | 明治18 | 7 | | 和歌山中学校を卒業 |
| 1892 | 明治25 | 7 | | 第一高等中学校を卒業 |
| 1893 | 明治26 | 11 | 17 | 三井銀行が田中製造所を継承し芝浦製作所と改称 |
| 1895 | 明治28 | 7 | 26 | 帝国大学工科大学電気工学科を卒業し芝浦製作所電気部に就職〔辞令〕 |
| 1900 | 明治33 | 8 | 18 | 芝浦製作所電気主任。同日から予算方電気主務・検査方電気主務を兼務（予算方電気主務兼務は1904年9月6日まで）〔辞令〕 |
| 1901 | 明治34 | 12 | 26 | 「発電機及び電動機ノ磁田鉄芯」の特許取得（第5087号） |
| 1904 | 明治37 | 4 | | セントルイス万国博覧会に直流発電機を出品し金牌受賞（会期は12月1日まで） |
| 1904 | 明治37 | 7 | 1 | 株式会社芝浦製作所創立 |
| 1904 | 明治37 | 7 | | 電気事業と電気機械製造業視察のためアメリカ出張（～翌年1月） |
| 1905 | 明治38 | 8 | 22 | 芝浦製作所電気部主任〔辞令〕 |
| 1906 | 明治39 | 11 | | 王子製紙嘱託技師として同社工務課長高田直屹と苫小牧工場建設事業に関する調査のためアメリカ・カナダ・メキシコ出張〔王子製紙社史〕 |
| 1909 | 明治42 | 4 | 16 | 通信省に臨時発電水力調査局設置（1913年6月13廃止） |
| 1909 | 明治42 | 7 | | 新潟県に電気化学研究所を設立（1916年株式組織化） |
| 1909 | 明治42 | | | 工業改良協会評議員〔工業2〕 |
| 1910 | 明治43 | 7 | | 電気機械製造業視察のためアメリカ・イギリス・ドイツ・フランス出張（～翌年2月） |
| 1910 | 明治43 | | | 大田黒重五郎らと化学工業研究会を設立〔実業之日本13(10)〕 |
| 1911 | 明治44 | 5 | 13 | 芝浦製作所技術部長〔辞令〕 |
| 1911 | 明治44 | 7 | 25 | 芝浦製作所常務取締役（1912年7月まで技術部長を兼務） |
| 1914 | 大正3 | 1 | | 商業視察のため中国・インド・南洋各地出張（～同年4月） |
| 1916 | 大正5 | 4 | | 電気協会総会で臨時発電水力調査局復興建議案を提出 |
| 1917 | 大正6 | 4 | | 通信省から電気機械製作並びに輸出に関する調査を嘱託される |
| 1918 | 大正7 | 5 | 23 | 藍綬褒章〔電気化学3(6)〕 |
| 1918 | 大正7 | 6 | | 通信省が発電水力調査事業に着手（～1922年11月）〔水力調査書〕 |
| 1919 | 大正8 | 6 | | 工学博士 |
| 1920 | 大正9 | 10 | | 東京ロータリークラブ創立会員 |
| 1920 | 大正9 | | | 交詢社常議員〔交詢社百年史〕 |
| 1922 | 大正11 | 2 | 14 | 芝浦製作所が神奈川県橘樹郡町田村に鶴見工場用地を購入 |
| 1923 | 大正12 | 9 | 1 | 関東大震災発生。翌日、芝浦製作所の東京工場が焼失 |
| 1924 | 大正13 | | | 秋頃、芝浦製作所鶴見工場の建設がおおむね完了 |
| 1924 | 大正13 | | | この頃、『明治工業史』の電気科編纂委員〔明治工業史〕 |
| 1925 | 大正14 | 4 | | 芝浦製作所鶴見工場で生産開始 |
| 1925 | 大正14 | 8 | | 芝浦製作所鶴見工場の第1期建設工事が完成 |
| 1925 | 大正14 | 9 | 11 | 芝浦製作所常務取締役・鶴見工場長を兼務 |
| 1926 | 大正15 | 9 | 13 | 芝浦製作所常務取締役・鶴見工場長・生産本部長を兼務〔辞令〕 |
| 1927 | 昭和2 | 3 | 4 | 神奈川県鎌倉町の別邸で没する |
| 1927 | 昭和2 | 3 | 7 | 東京市芝区の自宅で葬儀が行われる |
| 1927 | 昭和2 | 4 | 24 | 神奈川県鎌倉町の鎌倉海浜ホテルで追悼会が行われる |
| 1927 | 昭和2 | 6 | 26 | 自宅で岸敬二郎胸像（北村正信作）の贈呈除幕式が行われる |
| 1928 | 昭和3 | 3 | 15 | 東京市の電気倶楽部講堂で一周年追悼会が行われる |

注：芝浦製作所等の関連事項は2字下げで記載した。

出典：大竹武吉編『工学博士岸敬二郎伝』岸敬二郎君伝編纂会、1931年。木村安一編『芝浦製作所六十五年史』東京芝浦電気株式会社、1940年。東京芝浦電気株式会社総合企画部社史編纂室編『東京芝浦電気株式会社八十五年史』東京芝浦電気株式会社、1963年。このほか個別に文献を参照した場合は〔 〕内に記載した。また〔辞令〕は東芝未来科学館所蔵の辞令を示す。

表2：岸敬二郎の執筆記事・講演記事

| 番号 | 発行年 | 月 | 日 | 記事名 | 掲載誌, 巻号 | 頁 |
|----|------|----|----|--|-----------------|-----------|
| 1 | 1903 | 9 | 30 | 日本特許第五〇八七号発電機及び電動機の磁田鉄心 | 電気学会雑誌, 23(182) | 659-673 |
| 2 | 1905 | 9 | 30 | デサブラ水力発電所 | 電気学会雑誌, 25(206) | 639-654 |
| 3 | 1907 | 5 | 1 | メキシコ通信 | 電気之友, 190 | 436-438 |
| 4 | 1907 | 9 | 30 | メキシコの水力電気 | 電気学会雑誌, 27(230) | 679-699 |
| 5 | 1907 | 9 | 25 | 墨其西哥の水力 | 日本電気協会会報, 17 | 75-79 |
| 6 | 1908 | 1 | 15 | 特別高圧碍子破砕面の顕微鏡実検 | 電気之友, 199 | 113-114 |
| 7 | 1908 | 6 | 15 | 特別高圧碍子の新実験 | 電気之友, 209 | 870-871 |
| 8 | 1909 | 5 | 1 | 予が希望する工業研究所 | 工業, 2 | 20-22 |
| 9 | 1909 | 5 | 1 | 碍子につき研究結果の一二 | 電気之友, 230 | 602-603 |
| 10 | 1909 | 6 | 15 | 碍子に就ての研究結果の一二 | 日本電気協会会報, 23 | 75-81 |
| 11 | 1910 | 5 | 1 | 新に我国に現はれたる電気を応用する化学工業の新生面 | 実業の日本, 13(10) | 26-30 |
| 12 | 1910 | 8 | 15 | 米国スケネクタデーより | 電気之友, 261 | 277 |
| 13 | 1911 | 2 | 1 | 我等豈に発奮せざるべけんや | 実業の日本, 14(3) | 36-37 |
| 14 | 1911 | 3 | 1 | 余が欧米視察より感じたる水電界の二大急務 | 実業の日本, 14(5) | 17-19 |
| 15 | 1911 | 3 | 1 | 日本人の悪い癖 | 工業, 24 | 12-13 |
| 16 | 1911 | 6 | 30 | 欧米視察談 | 電気学会雑誌, 31(275) | 527-553 |
| 17 | 1911 | 7 | 1 | 水力電気事業の工事費に就て | 電気之友, 282 | 11-16 |
| 18 | 1911 | 10 | 1 | 〔新電気事業法施行規則に対する諸家の論評〕 技術者の仕事が面倒となれり (注1) | 電気之友, 288 | 483-487 |
| 19 | 1911 | 10 | 15 | 電気工芸の発達 | 新日本, 1(8) | 220-221 |
| 20 | 1913 | 1 | 1 | 余が劇務に当りて体力壮健なる所以 | 実業の日本, 16(1) | 134-136 |
| 21 | 1913 | 4 | 15 | 何故に水力電気の利用を電車電灯以外更に大に求むる所なきか | 実業の日本, 16(9) | 17-20 |
| 22 | 1913 | 4 | 15 | 小水力の利用と水車製造の独立 (注2) | 電気之友, 325 | 786-787 |
| 23 | 1913 | 5 | 30 | 小水力利用と水車製造の独立 (注3) | 日本電気協会会報, 34 | 95-109 |
| 24 | 1913 | 7 | 1 | 欧米に比し遜色無き我機械製造工業 | 電気之友, 330 | 11-13 |
| 25 | 1914 | 5 | 1 | 印度の電気業視察 | 電気之友, 350 | 748-750 |
| 26 | 1914 | 6 | 15 | 我國民の雄飛すべき新市場 | 実業の日本, 17(13) | 20-22 |
| 27 | 1914 | 7 | 10 | 印度視察談 | 工業, 64 | 15-19 |
| 28 | 1914 | 8 | 31 | 印度視察談 | 日本電気協会会報, 39 | 29-31 |
| 29 | 1914 | 9 | 10 | 西洋過信病を根治せよ | 実業の世界, 11(18) | 167-171 |
| 30 | 1914 | 10 | 15 | 〔欧州の戦乱と電気工業〕 電気製作者として時局に関する所感を述ぶ | 電気之友, 361 | 782-797 |
| 31 | 1914 | 10 | 15 | 電機製作者として時局に関する所感を述ぶ | 工業, 67 | 14-21 |
| 32 | 1914 | 12 | 1 | 我国電気化学工業は何の地方に勃興すべきか | 実業の日本, 17(25) | 55-56 |
| 33 | 1915 | 1 | 1 | 我国電機製作に就きて 附材料工業の振作 | 電気之友, 366 | 157-158 |
| 34 | 1915 | 7 | 1 | 時局の教訓 | 電気之友, 378 | 165-166 |
| 35 | 1915 | 7 | 26 | 二千六百キロヴォルトアンペア発電機に就て | 工業, 76 | 19-22 |
| 36 | 1916 | 2 | 1 | 電気機械製作用の薄鉄板に就て | 電気之友, 392 | 268-269 |
| 37 | 1916 | 8 | 15 | 職工優遇 | 工業, 8(89) | 7-9 |
| 38 | 1916 | 11 | 20 | 鉄鋼の独立自給策に対する討議 (電気機械用薄鉄板に就て) | 機械学会雜纂, 21 | 42-44 |
| 39 | 1916 | 12 | 15 | 電気計器の考案懸賞募集に就きて | 電気之友, 413 | 1053-1054 |

| 番号 | 発行年 | 月 | 日 | 記事名 | 掲載誌, 巻号 | 頁 |
|----|------|----|----|-----------------------------------|-----------------|---------|
| 40 | 1918 | 1 | 15 | 電機の供給は樂觀 | 発電水力, 35 | 3 |
| 41 | 1918 | 4 | 1 | 創刊滿三年を祝して所感を述ぶ | 現代之電機, 4(4) | 265-267 |
| 42 | 1920 | 4 | 15 | 〔ストライキに遭遇して痛切に感じたこと〕 学者側にも一考を煩したし | 実業の日本, 23(8) | 38-39 |
| 43 | 1920 | 8 | 1 | 自彊術で斯の如き難症一掃す | 実業の日本, 23(15) | 73 |
| 44 | 1920 | 11 | 15 | 電車電動機の制御法及其の最近の進歩 | 帝国鉄道協会会報, 21(8) | 589-596 |
| 45 | 1923 | 4 | 1 | 私を動かした熱誠の人 | 実業の日本, 26(7) | 25 |
| 46 | 1923 | 12 | 1 | 大光明を望んで復興に努力 | 実業の日本, 26(21) | 18-21 |
| 47 | 1924 | 7 | 1 | 真剣の力で工場を復興 | 実業の日本, 27(13) | 97-99 |
| 48 | 1924 | 9 | 28 | 思ひ出づるままに (鶴見工場新築に就て) | 芝浦レビュー, 第3年(1) | 3-10 |
| 49 | 1924 | 12 | 1 | 予の実験したる米国職工の模範的働き振り | 太陽, 30(14) | 2-5 |
| 50 | 1925 | 4 | 1 | 出世する青年の心懸 | 実業の日本, 28(7) | 28-32 |
| 51 | 1925 | 8 | 1 | 実際家となる為めの教育を望む | 工政, 69 | 28-29 |
| 52 | 1925 | 7 | 1 | 工業教育に関する卑見 | 電気之友, 614 | 38-39 |
| 53 | 1925 | 10 | 1 | 工業教育に関し海老崎氏に答ふ | 電気之友, 620 | 8-10 |
| 54 | 1926 | 1 | 1 | 国産奨励の本義と場当りの生産の廃止 | 電気之友, 626 | 74-75 |
| 55 | 1927 | 1 | 1 | 創刊三十七週年を祝す | 電気之友, 650 | 73 |

注1: 松川雄三との共著

注2: 田澤昌孝との共同発表

注3: 田澤昌孝との共著

当であった高田直屹は、「製紙工場の電力運転の先駆」として技術的功績は顕著であったと評価している¹⁵⁾。さらに、岸は日本各地で水力発電事業の導入に取り組んだ。早くは一八九九年に、岸は日田水電（大分県）の設立計画にあたり水力発電所の建設候補地を実地調査し、その結果を受けて芝浦製作所が発電機等を受注している¹⁶⁾。

岸はモーターをはじめ多くの電気技術を発明して特許を取得するなど、芝浦製作所の技術開発を主導した¹⁷⁾。このうち、岸が一九〇一年に特許を取得した「発電機及び電動機ノ磁田鉄芯」（特許第五〇八七号¹⁸⁾）の技術を利用した直流発電機は、一九〇四年のアメリカ・セントルイス万国博覧会で金牌を受賞した。なお、この間、芝浦製作所では主事に就いた大田黒重五郎によって組織改革が実施され、これを受けて岸は一九〇〇年八月に電気主任に任命された。また、一九〇四年七月一日には株式会社芝浦製作所が創立されている。

岸は、芝浦製作所の事業展開に貢献するだけに留まらず、より広く水力発電の普及を企図していた。表2に示したとおり、岸は著作や講演で水力発電の推進や工業製品の国産化を主張している。まず、一九〇四年七月から翌年一月にかけて、岸は芝浦製作所工場取締の小林作太郎とともに電気事業視察のためアメリカへ派遣された。視察から帰国した岸は、電気学会で講演してデサブラ水力発電所（カリフォルニア州）の発電設備等について紹介した（表2-2）。さらに、岸は一九〇六年に王子製紙の嘱託技師として苫小牧工場（北海道）の建設事業に関する調査のため同社の高田直屹とアメリカ等を視察し¹⁹⁾、帰国後に電気学会や日本電気協会でメキシコの水力発電事情について講演した（表2-4・5）。

また、岸は、海外視察で得た知見に基づいて新たな国産技術を展開させた。その代表が、送電に不可欠な碍子である。岸は、先述した一九〇

四年のアメリカ視察時にトーマス社製の碍子を入手し、帰国後に日本陶器合名会社社長の太倉和親にその製造を勧めた。太倉は「営利ではなく国家への奉仕としてやらねばならぬ」と決意し、同社では一九〇六年から特別高圧碍子の製造を開始した⁽²⁰⁾。この碍子に関して、岸は一九〇八年以降、電気関係の業界誌等を通じて研究成果を発表している(表2—6・7・9・10)。そして、自身が関与する電力会社で実用化を図った。一例として、一九〇六年に設立された箱根水力電気が挙げられる。同社は、岸が顧問技師として技術指導にあたり、神奈川県箱根町の塔ノ沢発電所(一九〇九年完成)と横浜市の保土ヶ谷とを送電線で結んで横浜への長距離高圧送電を実施した。この送電線には岸の勧めによって開発された日本陶器製の特別高圧碍子が用いられた。また、岸は同社の寒川恒貞に鉄塔の使用を勧めた結果、寒川はこれを実践した⁽²¹⁾。その後、日本陶器は国産碍子の製造と開発を進め、一九一九(大正八)年には同社の碍子製造部門を分離独立させて日本碍子株式会社が設立された⁽²²⁾。

(2) 水力発電事業と地図の利用

岸が関わった電力会社や関連企業は多岐にわたる。『工学博士岸敬二郎伝』によれば、鶴岡水力電気⁽²³⁾・山形電気(山形県)、高崎水力電気(群馬県)、上越電気(新潟県)、北陸電化(福井県)、長野電灯・信濃電気(東信電気(長野県)、日英水力電気(静岡県)、和歌山水力電気(和歌山県)、九州水力電気(福岡県)、竹田水電(大分県)のほか、富士製紙⁽²⁴⁾、富士瓦斯紡績⁽²⁵⁾、豊後電気鉄道⁽²⁶⁾が挙げられている。なお、これらの企業による水力発電工事のうちいくつかは間組が請け負っている。間組は、九州水力電気が岸を相談役として建設した女子畑発電所(大分県、一九一三年竣工)を契機として、富士製紙の野花南発電所と奔茂尻発電所(北

海道)、越後電気の関川発電所と大谷発電所(新潟県)、鶴岡水電の田沢発電所(山形県)の建設工事を請け負った⁽²⁷⁾。

岸が水力発電に注力していた様子は、当館や東芝未来科学館の関係資料からもうかがえる。まず、当館に寄贈された資料には岸が水力発電に関する調査のために利用した地図帳がある。岸は発電施設の立地条件を検討するために地図を常に座右に備えていて、これに基づいて河川の流域や落差、雨量等を概算したうえで実地調査を実施した。また、隣家に火事があった際、岸は子どもたちを避難させたあとで「一日も身辺を離さなかつた参謀本部の地図」を持ち出すよう知人に頼んだという逸話がある⁽²⁸⁾。当館に寄贈された地図帳は三冊あり、いずれも陸地測量部や農商務省が発行した一枚ものの地図を複数まとめ、革製の表紙と裏表紙を付して綴ったものである。このうち二冊は陸地測量部の五万分一地形図で、一八九七〜一九一〇年にかけての四一九枚を綴じる。残る一冊は農商務省の二〇万分一地形図と地質図で、一八八四〜一九〇八年にかけての一枚を綴じる⁽²⁹⁾。そして、農商務省のものには色鉛筆等による書込みが加えられた図幅がある。書込みの多くは山間部の尾根筋や河川の周辺に認められ、岸が水力発電に必要な導水管や貯水池の立地条件について検討するために記載したものと推測される。

次に、東芝未来科学館に寄贈された書簡には、水力発電と地図に関する記述が散見される。本稿で分析する岸の書簡はカーボン紙を用いた複写便箋に綴られ、書簡原本を差し出した後の控えとして岸の手元に残されたものである(図2)。書簡の綴は一九〇八年七月から一九二七(昭和二年)二月にかけて一六冊分があり、収められた書簡の総点数は四八一通に及ぶ(表3)。このうち最も古い一冊の表紙には「出張用 自宅投函」と記されている。また、一六冊分の書簡を通覧すると、その内容

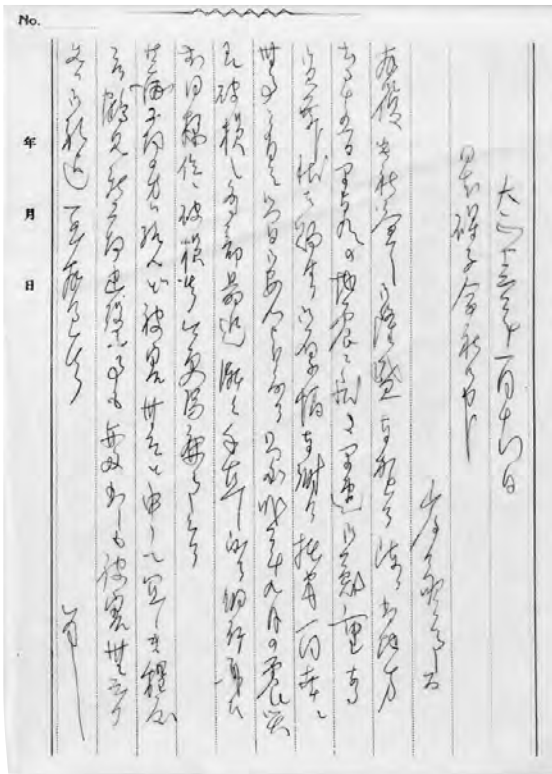


図2 岸敬二郎書簡（大正13年1月18日
日本碍子会社宛、東芝未来科学館所蔵）

は業務に関するものだけでなく私信も含まれていて、岸が自宅や出張先から差し出した書簡の控えであると判断される。

この書簡群のうち地図に関する内容のものとして、まず、一九〇八年の事例が挙げられる。岸は、一九〇八年八月六日に長野電灯株式会社社長や長野瓦斯株式会社取締役を務めた花岡次郎²⁷⁾に対して、糸魚川（新潟県）での踏査の参考として貸した農商務省の地図を至急返却してほしいと求めた（後掲資料1。以下で言及する書簡は、本文末尾に翻刻を掲載した）。さらに、同日には井上勘兵衛という人物に対して、高麗方面（埼玉県）での水力発電開発の参考として貸した農商務省の地図を至急返却するよう求めた（資料2）。これらの書簡で岸が返却を求めた地図は農商務省の地図であり、いずれの場合にも陸軍の地図ではない旨を注記して明確に区別している。これは農商務省の地図より陸軍（陸地測量部）のものの方が一般的であり、花岡や井上が混同する恐れがあると考えた

表3 東芝未来科学館所蔵岸敬二郎書簡の内訳

| 綴番号 | 年代 | 点数 |
|-----|-------------------------|----|
| 1 | 1908年7月29日～1908年8月15日 | 14 |
| 2 | 1912年10月28日～1917年11月28日 | 11 |
| 3 | 1923年10月18日～1923年12月12日 | 42 |
| 4 | 1923年12月13日～1924年1月23日 | 50 |
| 5 | 1924年1月24日～1924年2月19日 | 29 |
| 6 | 1924年2月23日～1924年3月20日 | 39 |
| 7 | 1924年2月9日～1924年5月12日 | 38 |
| 8 | 1924年5月19日～1924年7月25日 | 37 |
| 9 | 1924年7月29日～1924年9月22日 | 31 |
| 10 | 1924年9月18日～1924年11月15日 | 20 |
| 11 | 1924年11月19日～1925年1月12日 | 30 |
| 12 | 1925年1月22日～1925年10月14日 | 28 |
| 13 | 1925年4月14日～1926年1月22日 | 27 |
| 14 | 1925年10月21日～1926年4月23日 | 14 |
| 15 | 1926年5月5日～1926年9月10日 | 34 |
| 16 | 1926年9月10日～1927年2月3日 | 37 |

ためであろう。文面によれば、岸は、これらの地図を実地踏査や水力発電事業の参考として貸していた。一方で、地図の返却を求めた理由は具体的に示されていないが、この頃の岸は水力発電事業を積極的に推進していたから、同様の目的で利用しようとしていた可能性が考えられる。

特に関連が示唆される動向として、翌一九〇九年四月に逓信省が臨時発電水力調査局を設置して、全国の水力調査を始めたことが挙げられる。この臨時発電水力調査局は、水力発電の電源開発のための調査にあたって、陸地測量部の出版図（二万分一、二万五〇〇〇分一、五万分一、二〇万分一）や、農商務省の地形図、地質図、山林分布図（二〇万分一、四〇万分一）等の地図を参照していた²⁸⁾。また、先述した当館所蔵の旧蔵地図帳のうち農商務省のものは下限を一九〇八年とし、この頃に集約されたと推測される。なお、臨時発電水力調査局の事業は一九一三（大正二年）年六月に廃止されるが、一九一六年に岸が電気協会総会で「臨時

発電水力調査局復興建議案」を提出すると同会による陳情に至り、調査は一九一八年から一九二二年までの継続事業として再開された。³⁹⁾

次の事例では、地図の利用目的が具体的に判明する。岸は、一九二四年一月二三日に王子製紙社長の藤原銀次郎に対して、越後電力に関する書簡を出した(資料3)。岸は、自身が携わった電気化学研究所の発電所と越後電力の施設との接続を構想し、かつ買収を企図した。そして、越後電力の発展可能性を検討するため、地図を用いて既存発電所の上流に水力発電のための貯水池を設置しうる場所があることを確かめた。そこで、岸は越後電力が出力を増加しうる余地があると結論づけている。

以上のように、岸は芝浦製作所の技術者として製品の開発に取り組みとともに、社内に留まらず水力発電事業を中心として幅広く活動を展開した。書簡からは岸が築いた人脈の広範さが分かり、岸は後に芝浦製作所で関東大震災の復興事業を進めるにあたって、その人脈を活用した。

二 関東大震災と芝浦製作所

(一) 関東大震災による被害状況

岸は、一九一一(明治四四)年五月に芝浦製作所の技術部長に就き、同年七月には常務取締役選任されて技術部長兼務になった。当該期の芝浦製作所は創業地である東京の芝浦に工場を構えていたが、事業の拡大に伴って施設の充実を図る必要が生じる状況にあった。そのため、当初は芝浦の工場敷地を拡張して対応したものの、一九二二(大正一一)年には神奈川県橋樹郡町田村(現横浜市鶴見区末広町)に約一二万五千坪の土地を購入して鶴見工場の建設に着手した。⁴⁰⁾しかし、一九二三年九月一日に関東大震災が発生し、芝浦製作所は甚大な被害を受けた。地震自体による損傷は大きくなかった一方で、一日の夜半に芝浦の工場(以

下、鶴見工場と区別するために芝浦工場と記す)に近い金杉一丁目から出火があり、芝浦工場は延焼してしまった。⁴¹⁾

芝浦製作所は芝浦工場の復旧を急ぎ、震災から約一か月半後の一九二三年一〇月半ばには業務再開の見通しが立つようになった。岸の書簡のうち、関東大震災後で最も早い時期のものは一〇月一六日付である。これ以降、岸は関係者に対して震災復旧の状況を伝えたり、協力を求めたりする書簡を数多く残している。例えば、岸は一〇月一八日に信濃電気会社の丸山英一に対して、芝浦製作所の復旧は着々と進行していて年内には一切の整理が終了する予定であると知らせた(資料4)。また、この時点ではモーター類は一月から製造を始めるとともに、翌年の早々には全ての業務が再開できる見込みであった。

続いて、岸は一〇月二二日に大阪方面へ被害状況を伝えた(資料5)。この書簡は「大川田中両兄」に宛てたもので、両者はいずれも芝浦製作所の社員で大川忠吉と田中米太郎と推測される。⁴²⁾震災直後には東京から各地へ電報を打つ手段が途絶していたため、岸は、大阪へ赴く大阪三井物産の社員に対して九月六日に文面を託した。すると、当初の文面とは異なり芝浦製作所の損害は軽微であるとする情報が伝達された。実際には、「芝浦全滅」で死者が無かったのを幸いとするほどの被害であった。また、工作機械については八割から九割が被害を免れる見込みであり、一〇月下旬の時点では、木造工場の焼け跡に木造のバラックを建てている状況であった。そして、震災の当初は早期の業務再開のために京都や大阪の工場を買収する計画があった。しかし、買収を検討した工場の機械類が芝浦製作所のものより劣っていて、「芝浦従来の製品名声」を落とさないためには、芝浦製作所から優良な機械類を移す必要があるとして買収計画は断念された。岸の書簡からは、「芝浦全滅」と表現される

惨状から早期の復旧を目指す一方で、自社製品の名声を保とうとする姿勢が看取され、両者を天秤にかけた経営判断があったと理解される。

さらに、この書簡には製造再開の計画や、復旧に伴う工場内の配置見直しといった情報が具体的に記されている。まず、一月初めから小型モーターの製造を開始するという予定は、先述したとおりである（資料4）。その後、ファンモーターや変圧器、制御器等と続き、翌一九二四年一月早々には大型発電機の製造を開始する計画であった。また、工場内の配置を見直して工作機械のレイアウトを改善するとともに、工場内の道路拡張によって複線を敷設できる幅を確保して生産の能率が増進するよう企図された。この点について、岸は、雑誌『実業の日本』に寄せた記事で、「徒らに損失を悲観せず、直に前途の光明を望みつゝ、復興計画を樹てた」とし、「工場の配置を理想的に改善する絶好の機会」と捉えた⁴³と記している（表2―46）。

（2）震災後の人員削減

芝浦製作所は、震災復旧を進めるなかで大幅な人員削減を実施した。その結果、震災前の五月末時点で従業員は四、六一四名であったが、震災後には約四割減の二、六二四名となった⁴⁴。岸は、この人員削減に伴って関係企業との間の調整に奔走した。例えば、岸は一九二三年一〇月二七日付の書簡で三井鉱山会社の牧田環に対して次のとおり伝えた（資料6）。芝浦製作所は、三井鉱山の跡津川発電所（岐阜県）に関する製図作業のために職員を三名派遣していた。三井鉱山では一〇月一日頃まで出張を延長するよう希望したが、芝浦製作所では一〇月中に人員半減することになった。そのため、岸は派遣職員を芝浦製作所へ一旦引き上げたうえで、製図作業は続行して予定通り終えたいと提案した。そして、

このような事態について「人員淘汰の結果已むなき事情」であるとして理解を求めている。しかし、この書面の送出行き違いに三井鉱山の関係者が岸を訪問した結果、芝浦製作所は職員の滞在を延長することにした（資料7・9）。つまり、当初、岸は自社の人員削減の都合から派遣職員の引き上げを打診したが、最終的には三井鉱山側の希望を優先する選択をした。岸は自社が関東大震災の被害に直面している一方で、被災地から離れた現場での事情を勘案する必要に迫られ、難しい判断を下さなければならなかったと理解される。

人員削減の影響は単に職員配置の問題に留まらず、芝浦製作所から関係企業へ部署単位の移籍が検討される状況になっていた。岸は、一九二三年一〇月二七日付の書簡で井上亀之助に対して、当初、芝浦製作所は電熱器設計係を廃止して井上の会社へ移す予定であったが、芝浦製作所内で異論が出たために社員の移籍は中止になった旨を伝えた（資料8）。その理由として、アメリカのエジソンアプライアンス社との契約によって、芝浦製作所では電熱器の製造廃止が不可能であった等の事情が挙げられている。なお、井上は大坂電機会社や内外電熱等で重役を務めている、本書簡に記された電熱器設計係の移籍先が、どの会社にあたるかは不明である。しかしながら、この井上は岸と親しい関係にあり、書簡群には井上宛のものが二二通確認できる。よって、岸が、自身の人脈を活かして芝浦製作所の震災対応を進めようとしていた様子が分かる。

また、芝浦製作所は人員削減によって新規採用を見送らざるをえない事態に至った。例えば、旅順工科大学長事務取扱の神谷豊太郎が自校学生の就職について照会したところ、岸は一二月二日付の書簡で希望に沿えない旨を返答した（資料10）。さらに、岸は同日付の別の書簡で同人に対して次のように伝えている（資料11）⁴⁵。まず、芝浦製作所は九月二

日の早朝に近隣からの失火によって類焼し二万五千坪の工場が約三〇分で全滅した状況を記し、目下は復旧に努力して近日中に業務を開始する予定とした。そのうえで岸は、所員や職工一同は緊張していて、このような状況が継続すれば国家のためには幸せであると記している。岸は、従業員が自己本位に陥っていて国家や会社のため献身的に努力するものが減っているとして、日本は行き詰りの状態になっていると危惧する。そして、「会社内の気風一新」を図るために、総従業員の約四割を削減する決心であると伝えた。以上のとおり、岸は芝浦製作所が関東大震災後に進めた人員削減策について、従業員の間に広がる自己本位な考えを一新するための方策であると意味づけていた。一方で、岸は単に人員削減に取り組むだけでなく、退職者への配慮に意を尽くしていた。紙幅の都合から個々の事例は省くが、岸は退職者が再就職できるように関係企業や出身大学関係者へ打診している。

岸が関東大震災後の社会に自己本位な考えが広まっている状況を憂える背景には、自身の信念があった。岸は、その信念をロータリークラブのモットーである「Service above self」(超我の奉仕)という言葉で語っている。岸は、一九二〇年に東京ロータリークラブの創立会員となり、初代会長の米山梅吉によればクラブで最も規律を重んじ、かつ「奉仕の主義で世話好き」であった⁴⁵。岸は『実業之日本』に寄せた記事で、震災後には「自分の利益の為に他人に迷惑を及ぼしても構はない」とする者が多くなつたと述べたうえで、「Service above self 即ち自己」を超越して社会公共の為に貢献する」という「奉仕の観念」が肝要であると訴えている。さらに、そのような社会で出世しようとする青年は、「自己本位を去つて会社の為、又は社会の為に努力する信念がなくてはならぬ」と説いた(表2—50)。これまでに書簡を通じて確認したように、岸は

震災後に難しい経営判断を迫られる局面に直面してきたが、かかる信念をもつて対応してきたといえよう。

三 復興事業の取組み

(1) 芝浦工場の復旧工事

芝浦製作所の復興事業は、壊滅的な被害を受けた芝浦工場で製品が生産できる段階に達した。先述のとおり、一九三三(大正一二)年一月には一部の工場が落成したが、完全な復旧には至っていなかった。岸は、一月一五日に中央電気の国友末蔵に対して、芝浦工場の小型モーター工場とファンモーター工場が落成したが、工場内の電線が不足している状況を伝えた(資料12)。これは、住友に注文した電線が芝浦製作所に納品されていなかったためであり、岸は、国友に対して中央電気の在庫品があれば融通してもらえないか打診している。その結果、国友は岸の要請に応じて電線を融通した(資料13)。

このように芝浦製作所の復興事業は一部に支障が生じていたものの、岸は手応えを感じていた。岸は、一月二〇日に機械工学者で東京帝国大学工学部教授の加茂正雄宛てに小型モーターは同日から生産を開始し、年内には全ての事業を再開する見込みであると伝えた(資料14)。そのうえで芝浦製作所の所員や職工一同は緊張感を持っていて、以前に比べて能率が非常に高まるだろうと楽しみにしている様子を記している。実際、復興事業に邁進する岸は多忙を極めていた。関東大震災が発生した一九二三年の年末頃、岸は白金の自宅から芝浦の芝浦工場へ出勤していたが、週一回か二週に一回は鶴見工場へ通っている(資料15)。

そして、震災発生翌一九二四年の年頭には、芝浦工場の復旧は完了まで九割近い段階に至っていた(資料16)。しかし、同年一月一五日に

神奈川県西部を震源とする余震（丹沢地震）が発生し、幸いにも芝浦製作所に被害は無かったが、岸の自宅は損傷してしまった。岸は、余震の当日に親類や知人に対して被害状況を知らせる書簡を三通発出している、なかでも震源地に近い県西部の在住者に対しては被害の状況を案じている（資料17）。また、岸の手元には親類や関係者からの見舞状が届けられた。余震の三日後の一月一日に、岸は日本碍子会社からの見舞状に対する礼状を送り、自身や家族の無事を伝えるとともに、芝浦製作所の芝浦工場や鶴見工場にも被害が無い状況を知らせた（資料18）。

その後、芝浦工場の復旧工事は、工程の九割を終えてからが難航した。岸は、一九二四年二月九日に井上亀之助に対して、九割近くを落成させたもののそれ以後が思うように進められない状況を伝え、「百里の途ハ九十里を以て半ばとす」という成句をもって表現した（資料19）。また、三月十三日には田中米太郎に対して同様の表現で進捗具合を伝えている（資料20）。これによれば、当時はネジ一本が足りなかったり、ポール一個を紛失したりといったことから「まごつき居る実況」であった。工場が完成していないなか、小型モーターやファンモーターについては新製品を出荷できるようになっていたが、変圧器は新規製造に影響が生じる事態が生じていた。変圧器の巻型を製造する芝浦製作所の木型職人が、東京市内のほかの建築工事現場へ内職を求めて同社には出勤していなかったためである。これらの実態を伝える岸の表現からは、復興事業完成目前のどこかしさがうかがえる。

一方で、この頃には製品に関する問合せが入るようになっていた。岸は、芝浦製作所の目録についての照会に対して、震災のために会社が全焼し目録類が残っていないため、社員用のものも社外から提供を受けて間に合わせている状況であると伝えた（資料21）。さらに、震災によつ

て印刷会社が被害を受けたため京阪地方の業者を利用して対応している、近日中に目録を再発行する見通しは立っていないとしている。

（2）鶴見工場の建設と見学対応

岸は、芝浦工場の復旧を進める一方で、新設される鶴見工場内のインフラ整備に必要な資材を確保するため、関係者と自ら交渉にあたった。交渉先の一つに、先述した日本碍子の創立者である大倉和親が挙げられる。岸は、日本碍子の創設に携わり常務取締役に就いていたため同社と近しかった⁴⁶。そこで、岸は、鶴見工場で大量の土管が必要になった際、大倉に対して相談すべき会社を紹介してもらおうよう依頼した（資料22）。なお、後の書簡によれば、この土管は大倉が納入したと推測される（資料26）。さらに、工場建設にあたっては近隣企業に協力を求めている。例えば、道路修繕のための石炭殻が不足したため、同じ鶴見の埋立地に工場を構える旭ガラスの山田三次郎に融通を打診した（資料23）。

鶴見工場では、一九二四年春の時点で鉄骨の組立てとコンクリート工事を終える段階に至った⁴⁷。この基礎工事にあたり、岸は土木や建築の専門家を工場視察に招いている。特に多くの関心を集めたのが、地盤への杭打ち工事であった。鶴見工場では、アメリカのレイモンド社の「レイモンド・パイル」を用いていて、工事の請負人であるファーガソン社の副社長が日本の著名な技術者に見学してほしいと希望した。そのため、岸は四月下旬から五月上旬にかけて、関係者に鶴見工場の視察を呼び掛けている。書簡から判明する対象者は、土木工学者の中山秀三郎（資料24・27・28）、建築家の横河民輔（資料25）、長野宇平治、曾禰達蔵、中條精一郎（資料27⁴⁸）、橋梁技術者の樺島正義（資料29）、前出の大倉和親（資料30）である。また、六月二七日には東京の電気業界に関する記

者団一行が、鶴見工場と芝浦工場を参観した。⁽⁴⁾

その後、芝浦工場の復旧や鶴見工場の建設が順調に進んでいた様子が書簡に記されている。岸は、一九二四年七月二九日に徳島県の佐伯正夫に宛てた書簡で、復興事業の進捗と自身の心境を次のように伝えた(資料31)。まず、この時点で芝浦工場が社員の奮闘の結果から完全に復旧して能率も倍増している状況について、岸は「愉快」だと表現している。また、競争相手の同業者が芝浦製作所の不幸に乗じて製品を値上げした一方で、岸は工場の復旧と同時に小型モーターを一時的に二割値下げする決断をしたため、世間を驚かせた。そして、芝浦製作所としては工場の能率が増進しているから値下げは苦痛でなく、様々な面で能率が増進していて「愉快」であると記した。また、鶴見工場については、建物の建設がかなり進行していて九月には落成する見通しであると伝えてい

る。このように、岸は、芝浦工場が完全に復旧して生産の能率が増進した状況を「愉快」であると喜んでい

震災から一年が経過した一九二四年九月に、岸は芝浦製作所の社内報『芝浦レビュー』で復興事業の状況を概観した。岸は、芝浦製作所が復興するか否かは一営利会社の問題に留まらず、まさに「我国産業界の重大問題」であるとし、その意気込みを表現している。そして、鶴見工場の設計や施工法について注目すべきものとして、先述したレイモンド社による基礎工事のほか、柱の土台を鉄筋コンクリートを用いて連結した耐震設備、大容量の防火用給水設備といった点を紹介した(表148)。

鶴見工場では、一九二四年一月に主要な建物が完成し、機械類の据付は翌年八月に終了した。⁽⁵⁾この間の書簡からは、岸の前向きな姿勢がうかがえる。岸は、一九二五年二月三日に岐阜県在住の龍岡歳足に宛てた書簡で、鶴見工場の竣工を急いでいる状況であり、三月には工場を稼働

し作業を開始する段取りであると伝えた(資料32)。そのうえで、昨年中は各方面へ迷惑をかけたが今後は大に楽になるものと楽しみにしていると記している。

鶴見工場の建設を終えた後、震災から三年が経過した一九二六年になると、芝浦製作所の復興事業は一段落した。同年一月には、生産が軌道に乗った工場の見学を関係者に呼びかけている。例えば、岸は一月一六日に東京帝国大学理学部の中村に対して次のように伝えている(資料33)。中村は、既に東京と鶴見の両工場を見学していたが、岸は見学にあたって十分に対応ができなかった旨を謝った。さらに、次回は二時間くらいの滞在時間を見込んで見学に来てもらえれば、自身の体験談もふまえて案内ができるとしている。また、書簡には鶴見工場のパンフレットを二部同封した。

同様に、一月一八日には富山電気の山田昌作宛てに工場見学を勧めている(資料34)。この書簡によれば、山田のもとには芝浦製作所の加藤和雄が訪れていた。岸は、鶴見工場で一万キロワット以上の発電機を製造済であり、目下は三万キロワットの発電機の生産に取り掛かっていると伝えた。そして、山田が次に上京する際には「必ず一度」見学願いたいと、強く勧誘した。あわせて、参考までに鶴見工場の状態を撮影したパンフレットを一部同封している。中村の事例や、先述した一九二四年時点での基礎工事の見学は、土木工学や建築学を専門とする大学関係者向けであったのに対して、山田の場合は芝浦製作所の主力製品であった大型発電機を利用する顧客向けの営業と理解できる。あわせて、この頃には鶴見工場の案内パンフレットが発行されていて、芝浦製作所の復興事業が社外への営業活動に取り組み段階になっていた様子がわかる。また、一二月には雑誌『電気之友』記者らを鶴見工場に招き、南満洲鉄

道株式会社が発注による大型電気機関車が披露された¹⁾。

以上のように震災の発災以来、芝浦製作所の復興事業に邁進していた岸は、過労がたたったためか病を得てしまい、年が明けた一九二七（昭和二年）三月四日に没した。岸の書簡は、没する約一か月前にあたる二月三日付のものが最後である（資料35）。この書簡で、岸は名古屋市の佐伯猛男に対して栄転を祝っている。岸は、佐伯に祝意を伝えるとともに、自身は芝浦製作所に入所して満三十二年が経過したと近況を伝えた。そして、その間に不平を持ったこともなきにしもあらずではあったが、「過去を煩悶せず 現在に努力し 将来に希望を持つ」という言葉を標語として、日々仕事に打ち込んでいると記している。この標語からは、岸が震災という過去に捕らわれず、将来に希望を持って、復興事業に邁進しようとした姿勢が読み取れよう。

おわりに

本稿では、芝浦製作所の電気技術者であった岸敬二郎の書簡を通じて、関東大震災の復興過程の一例として芝浦製作所の被災から工場での生産再開に至る経緯を詳細に明らかにした。岸は、芝浦製作所の電気技術者として製品の開発に取組むとともに、その技術を活かして日本各地で水力発電事業に携わった。その際、電気工学や土木工学等の専門技術者や企業家との間に広範な人脈を築いた。そして、関東大震災で芝浦製作所が甚大な被害を受けると、岸は自身の人脈を活かして工場の復旧を急いだ。岸は、単に早期の復旧を目指すのではなく、自社製品の品質や名声を担保しようとし、両者を天秤にかけた難しい経営判断に迫られた。

また、芝浦製作所の復興事業は工場の再建というハード面での苦難だけでなく、大幅な人員削減という痛みを伴った。岸は、人員削減を社内

の気風一新を図るものと意味づけ、自己本位の考えを捨てて行き詰まりを打破しようとする姿勢でこれに取組んだ。このような復興事業に対して、岸は手応えや楽しみを覚えるとともに、工場の能率が増進する様子を愉快であると喜んだ。その一方で、震災翌年の余震では馬鹿らしさを感じたり、復旧工事の完成一歩手前ではもどかしさに当惑したりした。

以上のように、書簡からは岸が災害に対する恐怖や不安ではなく、多忙な日々の喜怒哀楽や、将来に希望を持って復興事業に取組んだ様子が看取できた。そして、これらの感情や信念は、復興事業の只中で難しい経営判断を迫られた際に一定の影響を及ぼしたのではないかと推測される。書簡を通じて明らかにしたとおり、岸は、目先の利益ではなく自社の製品の品質や名声に重きをおいたり、自社の復旧ではなく震災の影響が少ない遠隔地の企業の事情を優先したりしていた。これらの経営判断は、単純な経済的合理性だけでは導き出しにくく、その背景には岸に通底する姿勢が影響していたと理解できるだろう。

本稿の成果は、岸という一個人を事例としたものに留まる。今後、同様の観点から災害に直面した人々を広く対象として、人々の感情や信念が震災復興期の意思決定に及ぼした影響について分析したい。

翻刻

- ・漢字は原則として常用漢字を用いた。
- ・書簡欄外の日付を「」内に、筆者による注記を（）内に記載した。
- ・判読できない文字を□で示した。

資料1

「明治41年8月6日」

花岡次郎様侍史

敬二郎拝

拝啓先年糸魚川御踏査の際御参考用として農商務省(陸軍省ニあらず)出版の二十万分之一の地図御貸し申上候処昨今一寸必要あり売捌店へ買ひニ参候へ共既ニ売切れ何時再版スルヤ不明との答ニ有之候ニ付何卒至急御返却奉願度候

此程来芝浦より鎮目氏出張(広告の件)御世話ニ相成り居候ことと存候家族も愈明日出発軽井沢へ避暑の見込ニ御座候小生も同地迄送ルヤも不図候

草々

資料2

「明治41年8月6日」

井上勘兵衛様侍史

敬二郎拝

拝啓炎暑の折柄益御清安奉賀候陳ハ先年高麗方面ニ新水力あらんとて御参考迄ニ農商務省(陸軍ニあらず)出版の二十万分之一の地図御貸し申上置候処昨今必要あり更ニ売捌店へ買ひニ参り候へ共既ニ売切れ居り且つ何時再版スルヤ見込なしのことニ付何卒至急御返却ニ預り度候
小生ハ明日出発軽井沢へ避暑の家族を送り九日中ニハ帰京の予定ニ御座候

草々

資料3

藤原銀次郎様侍史

敬二郎拝

大正十三年一月廿二日

拝啓益々御清安奉賀候陳ハ

○越後電力の件

先日一寸工業クラブにて御話し申上候通り越後電力会社ハ現在三〇〇〇

KVAの出力を有し尚一万馬力の権利を保有仕り居り電気化学の発電所とを連続するニハ線路新設僅かニ二、三哩此予算七、〇〇〇円位にて足る次第にて目下電力ニテ売買交渉中の由なるも社長ハ中島平太郎氏でもあり書類明細ハ小生の手ニあり割安ニ買取出来可申(今日迄の実費七拾万円)電気化学の株を相当ニ渡して全部御引取り可然哉ニ被思候次第ニ候

上流の一万馬力の方ニハ旧時の湖水の跡ありとかにて地図上でも他に貯水池を設置して宜しき哉ニ見へる地点も有之然らば出力ハ更ニ増加する次第ニ御座候

会社のため御勘考相成度御都合次第小生より更ニ御説明可致候

先ハ右為念申上候度一書拝呈仕候

草々

越後電力ニハ飯田邦彦殿御生前監査役たりし次第にて飯田翁も同株式御所持の筈ニ有之創立の際小生へも御相談ありし次第ニ付小生としてハ飯田翁ニ対し御損を懸ケ度無之且つ至急御安心の行く様ニ致度次第ニ候

資料4

「12年10月18日」

信濃電気会社

芝浦

丸山英一様侍史

岸敬二郎拝

拝啓益々御多祥奉賀候陳ハ当所復旧事業も着々進行いたし本年内にて一切整理を了し可申予定ニ有之来年早々全部の仕事再開可致尤もモートル類ハ来月早々より仕事再開製造開始の段取ニ御座候間小生共の努力御認め被下度候〔後略〕

資料5

「大正12年10月22日」

大川田中両兄侍史

岸敬二郎拜

拜啓 Mr. Ryan ヨリ来状あり火災直後当方より出したる電報ニ多少の誤り起り芝浦の損害軽微と最初ハ御考へありし模様相分り申候当時混乱の際とて東京よりハ何方面へも打電の途なく已むなく大坂へ帰る大阪三井物産員ニ托し（九月六日）たるもの漸く九月十四日ニ貴地へ着の由にて而かも小生の original」と變りて参りたること相分り申候

要するに前文にて芝浦全滅を報し次で鉄骨と鋳物場丈ハ稍や助かり machine tools も幾分助かる見込死人の無かりしを幸福とするを意味したる次第二候 然し今ハ既ニ御了解と存じ候

machine tools の被害ハ意外ニ少く 80% to 90% ハ助かる目下の見込ニて最初ハ六七割と思ひしもの段々助かるもの増加し来り申候而かも今日既ニ約半分ハ修理を終り或者ハ既ニ work 致し居候随て木造工場の焼けたる跡へ再び木造の barrack を蔽ふ仕事ニ候

火災の当初ハ従来より財政上恐況ニ在る京都の奥村工場又ハ大坂の川北工場を買収して（先方より approach し来れるを幸ひニ）仕事を始めんかと考へ久保氏岸井氏を大坂京都ニ派し工場内を篤と研究せるも据付ある machines が芝浦ニ比し劣等にして芝浦従来の製品名声を落さぬ為めニハ大部分の優良 machines を芝浦より京都ニ移さざる可からず斯くてハ少くも運搬や据付ニ半ヶ年（目下尚未行「交」通機関復旧せざる状態なるを以て）を空費し早々仕事を始んと思つて反つて遅くなり實際ニ付他工場の買収を断念したる次第二候 前記の通り芝浦現場ニ在る machines ハ 80%迄助かり居り且つ修理不可能のものハ当初直ち三拾万円位の金を以て日本ニ在る米国製 machines の stock を買ひ入れ補充いたし候し barracks を建てる丈ニテ仕事を再開し得る次第御含可被成 随

て small motors ハ来月（十一月）初より開始し fan motors, transformers 引続き開始し制御器、配電器具、大型発電機の順ニ開始可致最後の大型発電機すら来年一月早々開始の段取ニ有之所員職工一同大努力中ニて目下の状態でハ予定通り進行いたし居候

barracks 再築と同時に従来ノ乱雑なる工場の配置を直し machine tools の layout を出来得る限り理想的ニ改善し工場内道路を拡張して double track を布設し得る程度（八間乃至拾間）となし製作能率増進を図り候随て工場建物の坪数ハ一万六千坪より一万壱千余坪ニ減少するも large castings, transformer, tank, switch board instruments (ammeter, voltmeter) 等 outside manufacturers を充分ニ利用し補充の考ニて右の次第ニ付従来よりハ delivery も早く cost も少くなると確信仕居候 Cancellation of orders ハ意外ニ少くて一割位の見込ニて是れ芝浦現場の復旧の早き為めニて壱千四百万円ノ注文を手に致し居るものより多くも式百万円の取消と思へバ安全の考ニ候

芝浦工場の新配置図御参考迄ニ封入仕候 Mr. Ryan, Mr. Jones 及 Mr. Emmons 氏等ニも此書面中可然貴下等より御説明被下度候特ニ此平面図ハ Mr. Emmons 氏ニ御示し被下度候 草々

資料 6

「12年10月27日」

三井鉱山会社

牧田 環様侍史

敬二郎拜

去る廿四付貴状正ニ拝見仕候跡津川発電所の製図ニ就き当所北村氏始め三名貴社へ出張製図中の趣きにて来月十日頃迄出張延期御希望の御事情拝承仕候当方の係主任に就き事情を取調べ出来得ル限り御便宜を図り度

存じ候処実ハ本月中ニて所内人員約半減を發表可致ことニ取極め昨日より辞令發送中ニ有之候右之次第にて北村氏等ハ一先づ当方へ引揚ゲ仕事丈ハ当方にて続行し不相變予定の通り来月十日迄ニ落成せしむるの考の由ニ付不惡御了承被下度則ち約半減の人員を以て復旧仕事を進行せしめながら貴所の御仕事を続行せしむるニハ是非共当方主任の手元ニ引取り贍写の如きハ女子を便役して充分なりとの意見二候

先ハ右御返事迄一書拝呈仕候

草々

要するニ予定の期日迄ニ貴所の仕事を完成せしむると共ニ当方の応急仕事をも監督せしめん希望の由ニて人員淘汰の結果已むなき事情御酌取被下度候

資料7

〔12年10月27日〕

牧田 環様

敬二郎様

拝啓先便にて北村氏外二名の件ニ関し御返事申上候処行違ひニ河合君御来訪有之候由ニて御希望ニ沿ひ可申ことニ致候但し事ニ依れば北村氏丈を残り外二名の内一名若しくハ二名を他の者と取換へ方可相願哉不図候此点枉げて御承認を得度然し可成取換へずニ済ます様可致候

草々

資料8

〔12年10月27日〕

井上亀之助様侍史

敬二郎様

拝復先般ハ色々難有御出張にて諸機械拝借出来仕合ニ御座候着し上ハ正式ニ芝浦より御預証差出可申候重て御礼申述候

人員淘汰ニ関し協議中の処略ぼ決定仕候而して兼て小生より御話し申出

置候電熱器設計係を廃し全部貴社へ移すの件ニ関し異論相出で随て石川氏佐伯氏白石氏転勤の義ハ中止の已むなきニ至り申候其理由ハ当所と米國エヂソンアップライアンス会社と契約の存する限り全然当所にて電熱器の製造を廢すること不可能なること及び貴社と協同して電熱研究を為すニハ当所内でも日常ニ電熱ニ関する研究を變らず進行せしめねバ貴下の所謂指導など思ひも寄らずとの二つの理由ニ依り電熱係を存続することニ相成申候右ノ次第にて石川氏等ハ必要ニ応じ時々貴社ニ出張し相共ニ研究發達ニ従事為致可申転勤の義ハ中止と御含被下度候

ヴァンスの組長ハ御世話出来可申

変圧器係より二三名ハ御約束通り取計ひ可申

右御返事傍御報迄

変圧器捲線機五台修理中ニ候

草々

資料9

〔12年10月29日〕

三井鋳山会社

牧田環様侍史

敬二郎様

拝復本日付を以て更ニ御書面を賜はり候北村技師外二名のことハ一昨日第二便にて申上候通り既ニ係主任の了解を得置候次第ニ付御斟酌被下間敷即ち来月十日頃迄今迄通り貴所滞在為致可申候先ハ右御返事迄一書拝呈仕候

草々

資料10

〔12年11月2日〕

旅順工科大学長事務取扱

神谷豊太郎殿侍史

芝浦製作所常務取締役

十二年十一月二日

岸敬二郎拝

拝復去る十月二十日附貴状正ニ拝受

陳ハ貴校本年御卒業の学生諸君御就職ニ付御照会之処多分御承知の通り
当製作所も去る九月二日早曉類焼仕り目下極力復旧事業進捗中ニ候へとも
も到底新規ニ職員職工採用の場合ニ無之否将ニ大淘汰決行の段取りニ相
成居候次第に付乍切角御希望ニ沿ひ兼候右不悪御了承相成度候 敬具

資料11

「12年11月2日」

神谷老兄侍史

敬二郎拝

十二年十一月二日

拜啓其後ハ誠ニ御無音ニ打過恐縮ニ候陳ハ去る九月一日当地方大震災災
の為小生家族ハ幸ニ怪我不致家屋の被害も人並にて相済み合せニ候但
し親類中ニテ二人(母子ニテ子ハ工学士) 圧死を遂ゲ申候

今回の被害ハ新聞紙上にて御想像以上ニ有之芝浦製作所ハ地震の被害ハ
多からざりしも翌二日早朝近所ニ失火あり類焼仕り損害壹千万円ニ近く
候而かも二万五千坪の工場が僅かニ三十分間位ニテ全滅せる次第多分御
信用被致間敷位ニ存じ候

目下極力復旧ニ努力中ニ候て近日仕事の一部開始可致本年中にて略ぼ整
理済の予定ニ候

所員職工一同緊張いたし居り此気分継続すれば邦家の為反つて仕合ニ候
近来ハ思想界御承知の有様にて従業員の心懸ハ総て自己本位ニ奔り大ニ

してハ邦家の為め小にしてハ会社の為献身的ニ努力するもの減じ所謂日

本も行詰まりの状態ニ在りし次第ニて小生ハ今回ハ己れの一身を曝して
も会社内の気風一新を図り可申随て総従業員四千余名中より壹千六百
名淘汰の決心ニ候

育英ニ当らるゝ貴下等も何卒学生諸君ニ緊縮節約を旨とし自己本位を棄
て、邦家の為め努力の精神を奮起せしむる様機会毎ニ奨励被致度
小生等も九月二日以来殆んど無休にて日々午前八時より腰弁当持参奮闘
いたし居候
先ハ近状概略御通知迄
草々

資料12

大正十二年十一月十五日

国友末蔵様侍史

敬二郎拝

拜啓当所小型モートル工場及 Fan motor 工場落成の処工場内電線手廻り
兼ね閉口仕居候住友へ注文済の分未着の為めニ御座候就てハ若し貴社在
庫品中左表の半数御持合セ有之候ハ、一時御融通相願度左記数量ハ右ニ
工場の所要全数量にて御融通ハ其一部分丈ニテモ結構ニ候

B. S. 第二種絶縁線
先ハ御願迄
草々

資料13

大正十二年十一月廿日

中央電気

芝浦製作所

国友末蔵様侍史

岸敬二郎拝

拜啓

○貴社御持合電線御融通の件

二関し早速御返事被下難有就てハ左の通り借用仕候度而して当社注文の
分着荷の上ハ現物を以て御返却可致候運送費ハ当社負担可致候先ハ御依
頼迄

B.S.#2 第一種線

壹、五〇〇尺

B.S.#4 第一種線

五、〇〇〇尺

B.S.#6 第二種線

一〇、〇〇〇尺

以上

草々

資料14

大正十二年十一月廿日

芝浦

加茂正雄様侍史

岸敬二郎

拝復十一月十四日付貴状正ニ拝見芝浦損害ニ付き御同情を賜はり奉謝候
如仰損害莫大ニ候も幸ニ積立繰越等ニて払込資本位ハ保留仕置候為め復
興ニハ便利ニ有之小形モートル類ハ本日より仕事開始仕候今年内ニハ一
切の事業再開の見込を以て勉強仕居候間御安心被下度特ニ所員職工一同
緊張仕り居り従前ニ比し能率非常ニ高まり可申と樂しみ居候

偕て朝鮮木幡氏御希望の電気技手候補者として別紙履歴書の武藤氏推挙
出来可申本人も承知仕居候職工の方ハ今暫く人撰御猶予被下度担任者の
方にて人撰中ニ御座候

先ハ右御返事旁一書拝呈仕候

草々

追て木幡氏の御書面中ニもある如く芝浦閉鎖云々の新聞記事ありしこと
見受候へとも競争者の卑劣なる宣伝より起りしものらしく意外ニ候

資料15

大正十二年十二月廿六日

都倉大兄侍史

敬二郎拜

拜啓今日当社株主総会出席の為外出中へ御来訪御面会を得ず失礼仕候
鶴見行ハ実ハ小生昨日朝九時頃田町駅発電車ニテ参り可申然し今後ハ毎
週一回又ハ少くも二週ニ一回参り可申ニ付御都合の善き時日御打合の上
御同行可致候

草々

鶴見駅下車、浅野造船所迄乗合自動車あり(徒歩五十五分を要す)自動
車便乗の便利ニて小生ハ午前中同地ニ居可申

資料16

大正十三年一月七日

五島醇八様侍史

敬二郎拜

拜啓本年ハ年賀状差控へ候段不悪御容赦被下度候
東京電化清算ニ就き種々非常の骨折ニ預り奉謝候御蔭にて兎角解決仕り
小生も幾分責任を果した様の感致し候然るニ去月廿一日付ニて態々御鄭
寧なる御挨拶ニ預り痛入申候此義御序ニ直木社長殿へ宜敷御伝言被下度
候

小生ハ御承知の通り芝浦全焼の復興ニ大車輪ニ働き居候今年ハ正月二日
より小生丈働き居候幸ニ今之処ハ予定の通り進行いたし先づ九割の落成
にてバラック建とハ申せ建坪壹万坪ニ上り中々の仕事ニ御座候御推察被
下度候六百四拾万の損害ニ有之候も土地の価格等ハ従来の俣として積立
繰越ニて填補し尽し尚式百五拾万の積立繰越残り候ニ付此点御喜び被下
度候二三年間ニ此損害を取返し申度小生の精神ニても今日の緊張味永続
するや否心元なく候

先ハ乍延引御挨拶迄

草々

資料17

横原兄侍史

岸敬二郎拝

大正十三年一月十五日

拝復十三日付貴状難有拝見仕候貴下益々御多祥御勤務の由大慶にて小生も芝浦復興事業と鶴見新工場工事の爲め今尚大多忙を窮め居候正月も元日一日丈休み二日より働き居る次第にて生命のある限りハ全力を尽して働くこと天職ニ不外と存じ居候

今朝五時五十分頃昨年九月一日二次ぐ大地震にて驚かれ申候拙宅も切角修理した部更ニ破損し馬鹿を見候貴社及貴宅ハ如何震源地ハ厚木方面の趣き相応の御被害ありしことと想像仕候芝浦ハ幸ニ今回ハ無事を得候

草々

資料18

大正十三年一月十八日

日本碍子会社御中

岸敬二郎拝

拝復貴社益々御隆盛奉賀候陳ハ当地方去る十五日早朝の地震ニ就き早速御鄭重なる御見舞状を賜はり御厚情奉謝候拙宅一同幸ニ無事ニ有之候間御安心被下度候只だ昨年九月の震災にて破損したる部最近漸く手直し致候箇所亦た前同様位ニ破損仕候今更馬鹿らしく候

芝浦工場の方ハ殆んど被害無之と申して宜しき程度にて鶴見新工場建設工事も亦た少しも被害無之候先ハ御礼迄一書拝呈仕候

草々

資料19

「大正十三年二月九日」

井上亀之助殿侍史

岸敬二郎拝

〔中略〕

○芝浦復興事案

百里の途ハ九十里を以て半とすの支那人の明言昨今思ひ当り居候昨年暮にて九分通り落成せしめたるも其以後ハ中々思ふ様ニ進行不致残念にても兎ニ角今一息二候

○鶴見工事

ハ米人の仕事として不相変キビ、致し最早鉄骨も二十余間建て終り申候鉄材も最後の分目下陸揚中ニ候〔後略〕

資料20

「大正十三年三月十三日」

田中米太郎殿侍史

岸敬二郎拝

拝復二月二十日付貴状難有拝見貴殿及大川君御無事の趣奉賀候陳ハ芝浦復興事業の多忙ニ追はれ御無沙汰ニ打過ぎ奉謝候昨年末迄ニ九分通りの工事を終り目下ハ捻子壱本不足とかポール壱個紛失とかでまごつき居る実況にて発電所の落成前と同じく最早出来上ツタにも同然と見へながら未だ完全とハ出来上らぬと申して宜しく候尤も Small motors, Fan motors ハ新製品を市場ニ出し居候変圧器工場も略ぼ出来済ニ候

東京市内仮建築工事多く芝浦の木型職工ハ此方へ内職を求め殆んど一人も出勤なきこと変圧器捲型の新製ニ影響為致申候支那の諺ニ百里の途ハ九十里を以て半とす^{ナカバ}とあり名言にて昨年末ニ既ニ九十里の途を終へながら今尚跡十里の中ニまごつき居候然し出来上りたる上ハ従前ニ優る能率を掲ゲ得ル様工場も機械も配置出来居候

鶴見新工場も着々進行し六千坪の Machine Shop の内の the bay (最高の

所) 既ニ鉄骨組立終り申候全建築落成ハ来ル十月初の予定ニ候
久保氏大橋氏佐藤鈴次氏 Machine layout の相談の為四月末出発同地へ参
り五月十一日頃貴地着可致候早々 Machines の撰定を終らねバ工場建築
出来ても無益ニ有之心配いたし居候〔後略〕

資料21

〔大正十三年三月十二日〕

小笠原範政様侍史

拝復益々御多祥奉賀候陳ハ

○芝浦製作所目録の件

御申聞の処多分御想像出来候通り昨年九月の大地震大火災の際当会社も
全焼し目録類一部も残り居不申会社当事者の入用品すら他より返却を受
ケ漸く間に合はせ居る状態ニ御座候而かも当地方の印刷会社の大部分も
全滅し京坂地方の印刷屋を利用して当面の急ニ応じ居る始末ニ付近日の
内ニ再び出版発行するやも受合兼候
封入の物ハ素人用の広告用のものにて是以外ニハ何物も今の処発行し居
らず可然御伝言被下度候

岸敬二郎拝

草々

資料22

〔大正十三年一月廿九日〕

大倉和親様侍史

岸敬二郎拝

拝啓益々御多祥奉賀候今ニ小生ハ不相変多忙にて正月二日より鶴見新工
場へ参り働き正月休をつぶし候始末ニ候然るに幸ニ身体ハ益々頑健此事
幸ニ御安心被下度候〔中略〕

○土管注文

当社鶴見新工場ニ於て可なり多量の土管入用ニ有て而かも異形の品あり
新製を要し申候就てハ何れの会社へ相談仕候而可然哉小生迄御示教被下
候ハ、難有仕合ニ御座候
先ハ右二件御願迄

資料23

〔大正十三年二月四日〕

旭ガラス会社

山田三次郎殿侍史

拝啓益々御清安奉賀候陳ハ

○石炭殻の件

多分御承知の通り当社分工場として目下鶴見埋立に於て新工場建築中ニ
有之候て道路修繕用として石炭殻不足仕り困難仕り居候就てハ御社の鶴
見工場ニ石炭殻の御不用量有之候ハ、御分与ニ預り度意味にて当所より
野村□□氏貴工場へ差出候度御差支無之候ハ、貴社鶴見工場御担当の方
へ御照会被成下間敷哉先ツ右御願迄一書拝呈仕候

岸敬二郎拝

草々

資料24

〔大正十三年四月廿二日〕

中山先生侍史

岸敬二郎拝

拝啓益々御多祥奉賀候陳ハ芝浦製作所鶴見工場ニ於て Raymond Pile
Co.の手にて所謂 Raymond pilesを打込み居り小生の見る所にてハ one of
best piles と考へ申候就てハ工事受負人な〆 Ferguson & Co. の vice
president Mr. Ruble ハ是非日本の prominent engineersニ実地御見分相願
度旨申居候て可成ハ向ふ一週間の内ニ鶴見へ御出懸被下間敷哉御都合小

生より御同申上候柴田兄ハ米国にて御実見被成候趣きにて切りニ推賞被致候ものニ御座候御出懸の際ハ右 Ruble 氏又ハ小生御案内可致候
貴校先生方の内にて御同行御希望の方ハ御同行被下候て宜敷但し鶴見駅より自動車の都合あり一時二三四人以上ハ無理ニ被思候但し自動車往復時間ハ三十分位ニ有之此時間御待ち下さるれば数組となつても宜敷又た乗合の自動車も有之候
草々

資料25

「大正十三年四月廿三日」

横河民輔様侍史

岸敬二郎拝

拝啓益々御清安奉賀候陳ハ芝浦製作所鶴見工場にて目下施工中の Reymond Pile の作業を日本の prominent engineers ニ御覧願度旨受負者 Ferguson & Co. Vice president Mr. Ruble より小生迄申出候向ふ一週間の内ニ御都合相付候ハバ右ルーブル氏又ハ小生御案内可致候右伺迄 草々但し御同行者あつても差支無之但し余り多人数一時ニ御出懸相成候てハ自動車の都合宜しからず候
詳細ハ交詢社にて御面会之節可申上候

資料26

「大正十三年四月廿五日」

大倉和親様侍史

岸敬二郎拝

拝啓益々御清安奉賀候陳ハ

○鶴見新工場用便器の件

鶴見新工場ニ於て日本式水流し便器購入の爲め仕様書出来致し居候小生ハ東洋陶器(?) 製品採用仕度且つ金具等の御世話も願度候付

同所駐在の工学士山下嘉郎君

ニ御面談相願度候尚同氏と共に Mr. S □ 従業中ニ付き英語の話せる方も御同行被成候方便利と存候
追て此程御納被下候土管の評判よろしく候
草々

資料27

「大正十三年四月廿六日」

山下嘉郎様侍史

岸敬二郎拝

拝啓

○長野宇平次君一行

曾祢博士中条君等一行十一名来る月曜日午前九時半東京駅集合十時頃鶴見駅着の予定にて行かれ可申此御一行ニ付ハ Ford car 及 truck 用意する様ニ今日河原君を経て鶴見工場へ伝へ置き申候若し他ニ便利なる乗物あらば御変更被下候て宜敷候多分小生も東京駅へ参り同行可致候

○工科大学中山秀三郎先生一行

火曜日午後二時鶴見駅へ中山博士、永山教授、白石講師外教授助教授合計六七名着の予定にて此方の乗物も可然御手配相願度候

○佐野博士

火曜又ハ水曜の午後(日も時間も今の処未定) 参らるゝ予定ニ御座候

○横河博士

今ニ返事無之候多分旅行不在中ならん

草々

資料28

「大正十三年四月廿六日」

工科大学

中山先生侍史

岸敬二郎拝

拝復昨今貴下御不快の御様子切角御静養相願度候陳ハ来週火曜日午後二時鶴見駅着にて芝浦新工場建築場工事御視察被下候由難有可成小生も同時刻ニ鶴見駅にて御待受可申上筈ニ候へとも万一差支起候節ハ芝浦より御案内者差出し可申多分河原工学士(米国スタンフォード出) 参上為致可申候右永山先生外各位へ御伝へ置被下度候 草々
追て先生ニハ腹胃御悪い様ならば鶴見駅と工場との間十二三分位の自動車ニ候も影響なき哉を心配仕候

資料29

「大正十三年五月一日」

東京市麻布区東町〔番地省略〕

樺島正義様侍史

岸敬二郎拝

拝復益々御清祥奉賀候陳ハ此程ハ御多用中ニ不拘遠路鶴見工事御視察被成下難有場所柄とて何の御構も不致失礼の段平ニ御容赦相願候西洋人一同も大ニ喜び居候小生より皆様へ御礼申述へあり度旨申出候反つて御鄭寧ニ御挨拶ニ預り恐縮ニ御座候乍延引御礼迄一書拝呈仕候 敬具

資料30

「大正十三年五月十二日」

大倉和親様侍史

岸敬二郎拝

拝啓益々御清適奉賀候陳ハ

○芝浦製作所鶴見新建築

ハ御承知の通り米国人ニ受負はせ居り日本の受負者とハ勉強の都合雲泥の差あり又た杭打ハ有名な Raymond piling Co. 独特の reinforced

concrete pile を打込み居り貴下御関係の会社にて将来工場御建築の際余

程御参考と可相成被存候付現場の工事此際(数日の内ニ杭打終り可申) 御一見相成候てハ如何都合相付候ハ、小生御案内可致候
今朝開作様へも御話し申上置候 草々

自宅電話

高輪 五、四八一番

資料31

「大正十三年七月廿九日」

徳島県名東郡八万村下八万

佐伯正夫様侍史

岸敬二郎拝

貴状難有拜見仕候時下炎暑之折柄貴下益々御多祥奉賀候陳ハ芝浦復旧ニ就き常ニ御心ニ懸ケられ難有幸ニ諸君の御奮闘の結果完全ニ復興仕り能率も以前ニ倍し愉快ニ候競争者ハ芝浦の不幸ニ乗じ代価値上仕候間ニ小生ハ復旧と同時に Small motors の如き一時ニ二割の値下を決定したる為め世間を驚かし申候能率増進の為め値下ハ一行苦痛でない次第ニ候各方面も多少ニ限らず何れも能率増進仕り居り愉快ニ御喜び下され度候

鶴見新工場の建築も余程進行し来る九月頃ニハ建築落成も致候

先ハ御返事旁一書拝呈仕候

草々

資料32

「大正十四年二月三日」

岐阜県吉城郡船津町

龍岡歳足様侍史

岸敬二郎拝

拝復貴下益々御多祥奉賀候陳ハ貴殿今回神岡水電御担当の由にて御鄭寧なる御挨拶を蒙り奉謝候何卒貴下一流の御努力を相願ひ度先ハ右御用迄一書拝呈仕候
草々

昨年中ハ芝浦工場の復興ニ努力仕候て既ニ落成仕候此上更ニ鶴見新工場の竣工ニ急ぎ居候是亦た来る三月頃より作業開始の段取りニ相進候間御安心被下度候昨年中ニ種々各方面へ御迷惑相懸候へとも今後ハ大ニ樂ニ相成候ことと楽しみ居候

資料33

「大正十五年十一月十六日」

東大理学部

中村先生侍史

岸敬二郎拝

拝復益々御清安奉賀候陳ハ先般弊社両工場御見分の際ハ一向御構も不出来失礼の段御容赦被下度然るニ反て御鄭重なる御挨拶を賜はり恐縮ニ御座候鶴見ニてハ貴殿の御時間の都合を考へ馳足にて御案内仕候為め充分の御視察を得ざりしこと御氣の毒ニ候次回ニハ一時間半以上二時間位の御見込みにて御出被下候ハ、今少しハ小生の体験談をも加へ可申候尚御帰途御見送り不致失礼の段是亦た御容赦預り度候別冊鶴見工場ニ関する Pamphlet 一部進呈仕候間御入手相願度候
敬具

追て先日一寸御話し申上候通り仕事ニハ必ず正確なる planning が必要あること日本人が兎角「無段取」と加筆あり」行当りバツタリの仕事を為す傾きあることを痛嘆致し居り幸ニ御同感ニ有之候ハ、例へバ実験の場合ニ初めより其目的ニ最も便利なる様機械ハ勿論小道具類の配置を考へ室内の往復も極度ニ少くする等少しでも労力時間を節約し整然たる順序を以て仕事を進行する習慣を学生の時より着けることニ御指導被下候

ハ、将来の利益不尠と愚考仕居候

資料34

「大正十五年十一月十八日」

富山電気

山田昌作様侍史

岸敬二郎拝

拜啓其後ハ御無沙汰ニ打過奉謝候陳ハ此程弊所加藤和雄氏参上御邪間仕候由其節同人よりも多分御話しいたし候通り当所鶴見工場愈整頓仕り改ニ一万余以上拾数台製作済にて目下三万余製造中にて就てハ次回御上京之節ハ必ず一度御見分相願度成可其際加藤へ御電話被下候ハ、同人御案内可致候尤も水曜日を除きたる平日午後ハ小生も在場いたし居候御参考迄ニ最近鶴見工場の状態撮影のパンフレット一部御目ニ懸候
草々

資料35

「昭和二年二月三日」

名古屋市中区広路町〔番地省略〕

佐伯猛男殿侍史

岸敬二郎拝

御書面拝見益々御清安奉賀候陳ハ貴殿段々御榮転之御様子平常御努力の結果ニ不外此上ハ益々誠意と忠実と努力を以て今迄通りの御方針を変へられぬ様致度存じ候
小生ハ昨年十一月二日を以て芝浦入所満三十二年を経過仕り其間不平をも起したることなきニ非らざるも今ハ例の

過去を煩悶セズ

現在ニ努力シ

将来ニ希望を持つ

を標語とし毎朝八時出勤夕五時半迄連続労働いたし居候義ニ御座候
先
ハ御喜び迄
草々

註

- (1) 大竹武吉編『工学博士岸敬二郎伝』岸敬二郎君伝記編纂会、一九三一年。
- (2) 「電気工業界にて世界的の発明を成しつゝある岸敬二郎君」『商工世界太平洋』八卷一〇号、一九〇九年、九八〜一〇〇頁。
- (3) 松本真一『紀伊偉材伝 第一線に立てる人々』青年日本社、一九二六年、一二〇〜一二六頁。このほかに例えば以下がある。渡辺慎治編『現代実業家月旦 天才乎人才乎』東京堂、一九〇八年、一八八〜一九〇頁。
- (4) ①木村安一編『芝浦製作所六十五年史』東京芝浦電気株式会社、一九四〇年。
②東京芝浦電気株式会社総合企画部社史編纂室編『東京芝浦電気株式会社八十五年史』東京芝浦電気株式会社、一九六三年。このほかに以下等があるが、本稿では上記二冊を参照した。東京芝浦電気株式会社編・発行『東芝百年史』一九七七年。
- (5) 三枝博音『三枝博音著作集 第九卷』中央公論社、一九七二年、五〇八〜五一二頁。初出は東條恒雄「技術家小伝 岸敬二郎」『科学主義工業』七卷一、二号、一九四三年、九八〜一〇三頁。東條恒雄は三枝博音の筆名。このほかに例えば以下がある。田村栄太郎『日本電気技術者伝』科学新興社、一九四三年、二八一〜二九二頁。
- (6) 森川英正『財閥の経営史的研究』東洋経済新報社、一九八〇年、五三〜五四頁。同様に、森川は岸を「わが国電気技術者の中軸的存在」とも評している。同『日本型経営の展開』東洋経済新報社、一九八〇年、一一四〜一一九頁。
- (7) 関東大震災に関する研究の蓄積は厚いが、例えば当館では二〇〇三年に特別展を開催した。神奈川県立歴史博物館編・発行『八〇年目の記憶―関東大震災といま―』二〇〇三年。また、関連して以下がある。寺寄弘康『関東大震災と復興』北原糸子編『日本災害史』吉川弘文館、二〇〇六年、三二九〜三五六頁。あわせて、同展が開催された二〇〇三年以降の動向は、以下に詳しい。吉田律人『関東大震災』研究の現在―震災八〇周年以後の研究動向を中心に―『年報首都圏史研究』一号、二〇一二年、四〜一七頁。
- (8) 関東大震災に関する手記を編纂した成果に例えば以下がある。武村雅之編『シリーズ日本の歴史災害五 手記で読む関東大震災』古今書院、二〇〇五年。フェリス女学院一五〇年史編纂委員会編『フェリス女学院一五〇年史資料集第一集 関東大震災女学生の記録』フェリス女学院、二〇一〇年。鎌倉市中央図書館近代史資料室編・発行『鎌倉震災手記 九八人が綴る鎌倉の関東大震災記録』二〇一七年。
- (9) 本項の岸に関する記述は、特に断らない限り前掲註1、註4①を参照した。
- (10) 三田商業研究会編『慶応義塾出身名流列伝』実業之世界社、一九〇九年、八〇九〜八一〇頁。
- (11) 第三高等中学校では一八八七年に予科第三級乙組で同級に幣原喜重郎・牧田環・鳳秀太郎らがいた。また翌年は第二級丙組で同級に幣原・水口（浜口）雄幸らがいた（『第三高等中学校一覽』一八八七年。同、一八八八年）。また、第一高等中学校では一八八八年に予科英第一級四組で同級に渡辺庚午郎らがいた。また一八八九年に本科第一部第一組、翌年に本科第一部第二組で両年とも同級に浅井（小川）琢治・持田巽らがいた（『第一高等中学校一覽』一八九〇年。同、一八九一年。同、一八九二年）。
- (12) 同校では一八九二年に電気工学科一年、翌年に同科二年。また一八九四年に同科三年で同級に渡辺庚午郎、木村駒吉、天野熊次郎、三根正亮がいた（『帝国大学一覽』一八九二年。同、一八九四年。同、一八九五年）。
- (13) 「The Calculations of Multi Phase Motors, with a Design of a 25HP Two Phase Motor (二相式交流電動機の設計)」東京大学工学・情報理工学図書館所蔵。
<https://curration.library.t.u-tokyo.ac.jp/s/db/record/59734969-c4ae-440d-9196-6e0febbe2b> (同館「工学史料キュレーションデータベース」二〇二二年一月二六日閲覧)。本資料については揖斐洋一氏の教示を得た。
- (14) 前掲註4②、六四九頁。

- (15) 前掲註1、一五三頁。さらに、岸は同社苦小牧工場の建設や千歳第一発電所の発電機新設に関わった。成田潔英『王子製紙社史 第二巻』王子製紙社史編纂所、一九五七年、一七九～一八三頁。東京放送編・発行『足立先生を語る』一九七五年、一一七頁。
- (16) 東定宣昌「明治中期九州地方の電気業―電灯会社・水電会社の設立経過を中心として―」『経済学研究』四二巻一号、一九七五年、六三頁。このほか、岸は芝浦製作所の大田黒重五郎とともに九州水力電気設立に携わった(同「北九州地方における電力圏の成立―筑豊における炭鉱電化の予備考察―」『エネルギー史研究』一五号、一九九一年、一三二～一三七頁)。なお、九州地方における水力発電開発の動向については以下も参照した。九州電力株式会社編・発行『九州地方電気事業史』二〇〇七年。
- (17) 芝浦製作所における技術開発や岸の役割については、以下に詳しい。西村成弘「外国技術の導入と特許部門の役割―芝浦製作所における特許部門の設立と展開―」『国民経済雑誌』一八六巻四号、二〇〇二年、一～一八頁。市原博「芝浦製作所の技術開発と技術者人事管理」荻野喜弘編『近代日本のエネルギーと企業活動』日本経済評論社、二〇一〇年、一七三～二〇〇頁。
- (18) 岸敬二郎「日本特許第五〇八七号発電機及び電動機の磁田鉄芯」『電気学会雑誌』二三巻一八二号、一九〇三年、六五九～六七三頁。特許明細書は以下で公開されている。 <https://www.j-plipat.inpit.go.jp/c1800/PU/JP-5087/B3C4CD95194B82D180DD3C7CD4D30CE32E0EFAF6243EC17FAFF73ED19FF77DE/15/> (工業所有権情報・研修館「特許情報プラットフォーム」、二〇二二年二月二六日閲覧)。
- (19) 前掲註1、一四七～一五六頁。『王子製紙社史 本編』王子製紙株式会社、二〇〇一年、五二二～五二三頁。
- (20) 日本碍子株式会社編・発行『日本碍子株式会社三十年史』一九四九年、二～五頁。
- (21) 寒川恒貞伝記編纂会編『寒川恒貞伝』社会教育協会、一九四九年、二九～三五頁。また、箱根水力電気の動向は、以下に詳しい。中村尚史「日露戦後における電気供給システムと京浜地域―横浜電気と富士瓦斯紡績を中心に―」横浜近代史研究会・横浜開港資料館編『横浜近郊の近代史―橘樹郡にみる都市化・工業化―』日本経済評論社、二〇〇二年、二二一～二五三頁。
- (22) 前掲註20。日本陶器や日本碍子の動向については、以下も参照した。前田裕子『水洗トイレの産業史』名古屋大学出版会、二〇〇八年、一〇三～一〇五頁。宮地英敏「近代日本の陶磁器業」名古屋大学出版会、二〇〇八年、二一三～二五五頁。
- (23) 同社は一九一〇年開業(東北電力株式会社編・発行『東北地方電気事業史』一九六〇年、一七〇頁)。岸の発案に着想を得た芝浦製作所技師長の潮田伝五郎が、鶴岡水力電気は今井三郎と協議して灌漑用電動ポンプを導入された(前掲註1、五六～五七頁)。
- (24) 同社は一九〇三年設立、岸は顧問技師(東京電力株式会社編・発行『関東の電気事業と東京電力』二〇〇二年、一四八頁)。
- (25) 岸は大田黒重五郎を通じて金子伊太郎(後に同社発起人総代)の相談を受け、関川水系での水力発電を勧めた。その結果、名香山村蔵々に発電所の建設が計画され一九〇六年に同社が創立された。創立当時、岸は同社主任技師(高田市史編集委員会編『高田市史』高田市役所、一九五八年、七九三～七九八頁)。また、岸は国友末蔵(後に中央電気専務取締役)に同社への就職を勧めた(前掲註1、一四一～一四三頁)。
- (26) 同社は一九一七年設立。岸は同社社長の鈴木三郎助と大正初年以來の知り合いであった。鈴木は一九一六年に電気化学工業への進出について岸に相談したところ、岸は長野電灯取締役の小坂順造と取締役兼技師長の高橋保を紹介した(味の素株式会社社史編纂室編『味の素株式会社社史 一』味の素株式会社、一九七一年、一一九～一二〇頁)。
- (27) 岸は一九〇六年に同社の創立事務所設立に際して発起人。また一九〇八年に日英共同株式会社設立に際して創立委員(中部電力株式会社編・発行『大井川その歴史と開発』一九六一年、三七二～三九四頁)。
- (28) 岸は一九一〇年に同社の創立に際して相談役(桜井督三編『九州水力電気株式会社二十年沿革史』九州水力電気株式会社、一九三三年、八～九頁)。
- (29) 一九九九年の時点で、岸は、同社から受注した六〇キロワット三相式交流発電

- 機の試験を実施している。当時、同様の発電機は外国でも二、三か所できれ製造されていなかった(前掲註1、七〇頁)。
- (30) 岸は、一九一八年に同社社長の窪田四郎から依頼を受け同社江別工場に関して助言した(河野幸之助『高島菊次郎伝』日本時報社出版局、一九六二年、二五三頁)。
- (31) 岸は、第一高等中学校在学中から親交があった持田巽に富士紡績(後に富士瓦斯紡績。持田は後に同社長)への就職を勧めた。持田は、同社における電気事業の基礎が確立されるまでの間、「岸君の尽力は非常なもの」であったと回顧している(前掲註1、一一四～一一六頁)。
- (32) 同社は一九〇七年に大分水電と合併して水力発電に取り組み、一九〇八年から沈墮発電所(大分県大野郡)の建設工事を開始。岸は顧問技師に就いた(九州電力株式会社編・発行『九州地方電気事業史』二〇〇七年、一三八頁)。
- (33) 前掲註1、四一～四二頁。
- (34) 間組百年史編纂委員会編『間組百年史 一八八九～一九四五』株式会社間組、二二〇～二二六・二八〇～二八二頁。
- (35) 前掲註1、四〇～四二・六六～六七頁。
- (36) 本資料の分析にあたり、揖斐洋一氏、宮迫弘氏、林大作氏のご協力を得た。
- (37) 花岡は信濃新聞株式会社監査役・取締役、株式会社信濃銀行監査役・常務取締役等を務め、一九一五年時点で長野電灯株式会社社長、長野瓦斯株式会社取締役、長野県参事会員長、長野商業会議所特別議員(内尾直二編『人事興信録 第四版』人事興信所、一九一五年、は二六頁)。花岡については以下を参照した。名古屋大学日本研究のための歴史情報プロジェクト『人事興信録』データベース」<https://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/> (二〇二一年二月二六日閲覧)。
- (38) 臨時発電水力調査局編『発電水力調査書 第一巻』通信省、一九一四年、二九頁。前掲註1、四三頁。
- (39) 前掲註4①、八〇～八一頁。
- (40) 前掲註4①、三一八～三二〇頁。
- (41) 前掲註4①、一六四頁。
- (42) 前掲註4②、六七頁。
- (43) 前掲註4②、六七頁。
- (44) 岸は、神谷に対して同日付で二通の書簡を送っている。一通(資料10)は「旅順工科大学校長事務取扱 神谷豊太郎」宛に「芝浦製作所常務取締役 岸敬二郎」の差出人名で発出し、もう一通(資料11)は「神谷老兄」宛に「敬二郎」として差し出している。前者は照会に対する公的な返答であり、これに私信として後者を添えて送ったものと推測される。
- (45) 米山梅吉「私の見た岸君」、前掲註1、一五九～一六〇頁。
- (46) 前掲註20。
- (47) 前掲註4①、二七八頁。
- (48) 資料27には、このほかに「佐野博士」が見学予定であると記されていて、佐野利器を指すと推測される。
- (49) 「大芝浦の復興振り」『電気之友』五九一号、一九二四年、一〇六～一〇七頁。「芝浦製作所の復興ぶり」『交通と電気』三巻七号、一九二四年、四七～五〇頁。「復興せる芝浦製作所を観る」『工業雑誌』六〇巻七六四号、一九二四年、三八二～三八三頁。
- (50) 前掲註4①、二七八頁。
- (51) 「芝浦製作所鶴見大工場と大型電気機関車の処女作」『電気之友』六四九号、一九二六年、三六～三七頁。

〔付記〕

岸敬二郎関係資料をご寄贈いただいた岸秀雄氏(故人)と岸千鶴子氏に深く感謝いたします。また、同資料の寄贈にあたっては上田由美氏(横浜市史資料室)に、東芝未来科学館所蔵資料の調査にあたっては林大作氏(東芝未来科学館)、笠井達氏(同)にご高配を賜りました。さらに、当館所蔵地図資料の分析にあたっては揖斐洋一氏(東芝産業機器システム株式会社)、宮迫弘氏(同)、林大作氏のご協力を得ました。記して厚く御礼申し上げます。なお、本研究はJSPS科研費一九K一三四五一の助成を受けたものです。